

美術

竹内 美弥

デジタル依存ではなく、自然から学び平和の中で豊かに生きるために

定例の部会を開くことが厳しくなっていますが、図工・美術科は共に一人職場なので、顔を合わせて実践作品と共に話し合いができるのは貴重な機会です。

中学校の美術部で、校庭で手に入る草花―アジサイやムラサキツユクサ、ラベンダーなどを水彩で描いた作品。本物の自然のモデルを目の前にした子どもたちが、花・茎・葉の生き生きとした動きや色をよく観察し気持ちを込めて描いている様子が伝わってきます。また、4月に入学してきたばかりの1年生が昇降口前のビオラを1本ずつ手に取って春の優しい色を淡彩で描いた作品。「かわいい」と口にしながらか小さな花のつくりをよく見て完成させた絵には「希望」「新しいこともがんばります」と、今の気持ちを言葉でも添えています。

デジタルをツールとして使う以上に結

果的に依存させるような仕組みが、学校の中に乱暴に入ってくることを図工・美術では懸念しています。

タブレットのような狭い画面で指先だけをタッチする感覚ではなく、身体全体で紙や絵の具、粘土や木・金属、様々な道具にじかに触れて、無心に一つのことに向き合える作業。気づいたら隣の友だちも同じ感覚をいっしょに味わっていたという喜びを感じられる時間と空間。図工・美術は子どもたちが発達を保障され、子ども時代を豊かに生きることには大きな役割を持っていると思います。

昨年の東京教研でも、初めて木工に取り組んで道具の扱い方や制作過程をクラス友だちと助け合いながら楽しく制作した小学生の成長する様子がレポートされました。初めは思うようにならない

素材も、自分の手で感触を確かめながらその特徴をつかみ技術を獲得して一つの形になっていくことを実感できて、子どもたちに大きな自信をつけてくれます。完成した作品を使って友だちといっしょに遊んだり、苦労した思いや作品にこめたイメージを鑑賞し合う活動が子ども同士を結び付けてくれるのです。

自画像の実践で戦没画学生の残した作品を鑑賞して、平和や、絵を描くことの意味を考え、自分自身を見つめ直す機会と受け止めていた様子を聞きました。作品を通して時代や社会の中で人の生き方を真剣に考えられる一方で、保護者や塾の期待や目標に大きなストレスを感じて身動きが取れなくなったり、乱暴な行動を取ることでしかできなくなってしまう子どもが少なくありません。また、教員自身が週に24や25時間という持ち時数が強要される小学校や、1校600人を一人の教員で担当する中学校の厳しさなど課題は山ほどあります。日々のさまざまな思いを、子どもの作品を囲みながらみんなで語り合いましょう。ぜひご参加ください。

(共同研究者)